

講演会 & ライブ な日々 ②1

古川 秀明

「家族造形法」の続き

事前に申し込みのあった家族5人のケースで家族造形法を実施した。

役割分担は、基本的に立候補制にしているが、どの役割もみなさん積極的に立候補された。

初めて参加される方は、どなたも半信半疑な感じだ。

しかし、造形が進むにつれ、その不思議さに魅了されていかれた。

特に事例提出者の驚きは大きかったようだ。

役割を演じる人から出てくる言葉が、自分の経験した家族の言葉とぴったり一致していたからだ。

最初の家族の造形から、だんだん変化させて行き、解決や変化の方法を模索していく。

家族造形法では、時間軸を自由に操作できる。

家族の過去にも未来にも移動できる、想像力というタイムマシンだ。

しかも、ほぼ現実と重なるから不思議な技法だ。

造形法で大切なのは、役割を演じている人のみならず、それを観察しているギャラリーの意見だ。

家族を外から客観的に眺めることにより、役割を演じている人や、事例提出者には見えなかったり、感じられなかったりする情動に気づくことができる。

「お父さんにこんなことを聞いてみたい」

「お母さんをもう少し長男から離してみたら、長男はどんな気持ちになりますか？」

「妹さんは、そこにいて寂しくないですか？」

「おばあちゃん、そこで見ていてどんな感じですか？」

こんな意見が矢継ぎ早に寄せられていく。

父「私はもっと尊重して欲しいです」

母「長男と離れると寂しいです」

長男「僕はお母さんの手が僕の肩から離れて、とても楽になりました」

祖母「もう少し息子が家庭を顧みないといけないと思いました」

それらの意見を集めて、グループで話し合ってもらおう。

ギャラリーグループ、役割を取った人グループなど、グループ分けはその状況に応じてフレキシブルに決めることができる。

そういう意味では、家族造形法は実に自由度の高い技法とも言える。

自由度が高いほど「対話」が充実して、新しい発想、発見、ひらめきを得やすくなる。



最後はみんなで振り返りのシェアリング。
造形法の魅力にすっかり取り付かれた人もいれば、まだ半信半疑な人もいる。

いろんな反応があるほど、研修会は充実する。

家族造形法では「感じる」ということと、「対話する」ということが常にセットで動いている。

「感じる」「俯瞰する」「客観的に眺める」という行為に付随した参加者の「対話」が新しい変化やひらめきを生み出している。

家族造形法の魅力は、家族のみに使われるのではなく、およそ人が集まる「集団」に適用することができる。

職場や友人関係など、その応用範囲は広い

真夏の一日、皆様と良き研修会を過ごさせて頂いた。

シンガーソングライター
ふるかわひであき